ところが、山田旅団長は「各隊食糧ナク困却ス」と記した。それはなぜなのか。

果たして山田旅団長は「皆殺セ」という命令に忠実に従ったのであろうか。それとも、両角業作連隊長の回想にあるように、「山田少将は頑としてハネつけ、軍に、収容するよう逆襲していた」のであろうか。あるいは「投降兵は武装解除後に戦場から追放して、捕虜にはしない」という軍の原則を楯に、抵抗していたのであろうか。

山田旅団長が「皆殺セ」という命令をどう受け止めていたか、わずか三行の記述だけでは何とも言えない。

故意の放火

ともあれ、幕府山要塞の地下倉庫に備蓄された食糧が発見された。渡りに舟とばかりに、それがバラック棟に運び込まれる。やがて、投降兵自ら自給自足するよう、指示が出た。投降兵の炊事が始まった。

ところが、ある一棟から出火した。不注意で出火させれば寒天の下で眠らなくてはならないから、不注意の出火ではなかった。意図的な放火であった。両角連隊長は、脱走を狙った放火と判断した。これが収容三日目（十二月十六日）のことになる。

この放火事件は、「第十三師団山田支隊兵士の陣中日記」の筆者十九名中、四人が陣中日記に記す。